



MESSAGE まちライブラリースタッフからのメッセージ

まちライブラリーブックフェスタin関西、マイクロ・ライブラリーサミットが延期となり、休館が多くなっています。近況をかねて、スタッフからメッセージを届けます。各館の休館状況はHPで確認してください。
まちライブラリー HP machi-library.org/

新緑のなか、窓全開で開館中

ISまちライブラリー

近隣の本の虫の子どもと大人、ベビーカーの親子がささっと借りにきてくれます。先日、公園の側を歩いていると、常連だった小学生4人が「あっ、まちライブラリーの人！めっちゃ久しぶり!!」と言って元気に駆け抜けて行きました。珠玉の一瞬でした。(小野)

本と木濡れ日はいつもと変わらず▶

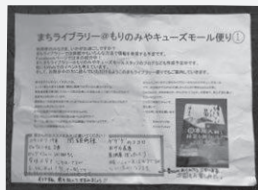


見て、書いて! 壁新聞

まちライブラリー@もりのみやキューズモール

毎日来られるご近所の常連さんや、絵本を求めて来る子どもたちの集いの場となっているもりのみやのまちライブラリーも休館中。私たち同様、寂しい思いをしている方たちと繋がれたらと、FBでの本紹介、スタッフの日常ブログ、オンラインイベント、壁新聞を始めました。書き込みがあった時の喜び! 人との繋がりの大切さが改めて感じられました。(川上)

入口に貼られた壁新聞▶



積読本 < 癒し猫

まちライブラリー@大阪府立大学

本好きの常連さんたちならこのお休みにたくさん本を読まれていて、再会できた日には本の話が止まらないはず! そのために私も読書に動しまねば。ラッキーなことに(?)積読本が山のように目の前に。自粛生活の終わる日が早いか、私の積読解消が早いか。…でもつついスマホを触って、猫の動画を眺めて時間が過ぎてしまうんだよね。(荒川)

6つの巣箱

まちライブラリー@千歳タウンプラザ

臨時休館中ですが、6つの「本の巣箱」で貸出をしています。①「おうち時間を楽しむシリーズ」、②「超大作シリーズ」、③「現実逃避シリーズ」、④「親子で楽しむシリーズ」、⑤「スタッフおすすめシリーズ」、⑥「まだ読んでない?シリーズ」。巣箱が可愛いくて、つい開けたくなっちゃう! 手の消毒液もありますので、安心してご利用いただけます。(長尾)

形も色もいろいろ、本の巣箱▶



美味しいおすすめ本

まちライブラリー@南町田グランベリーパーク

私のおすすめの1冊は、古内一絵さんの『マカン・マラン—二十三時の夜食カフェ』。気まぐれに開く夜食カフェの店主シャルは、傷ついた人しかたどり着けないこのカフェで、体にしみる食事と心にしみる言葉で来る人を勇気づけます。まちライブラリーでも、本を通じて皆さんを見守るシャルでありたいです。お会いできる日を楽しみにしています。(金城)

返却ボックス活躍中

まちライブラリー@ウエリスオリーブ成城学園前

成城学園前のまちライブラリーの様子をお知らせします。まずは施設内のレイアウト変更をして通路としてのスペースを確保しました。図書館の利用はできませんが、ウエリスオリーブ居住者の皆さんは本の利用が可能で、返却はボックスに、というシステムを取っています。返却された本を見ると、皆さん時間がある時でないかと読めないような大作に挑んでいる様子がわかります。上下巻などセットで借りてセットで返却。寝不足注意です。(佐藤)

本日の返却本▶



家族で制作

まちライブラリー@ウエリスオリーブ東村山富士見町

平日頃からまちライブラリーへの愛溢れてやまない東村山のスタッフです。Stay Home週間、ついに夢を実現させることに。題して「いつかは立派な『まちライブラリーの巣箱型本箱』になり木箱」プロジェクト。レシピを描き、材料を寄せ集め、遠くからでも目に留まるように屋根だけ茜色に。釘は一本も使わず速乾ボンドだけ。ポチの家ふうになってしまいましたが、家族で非日常を楽しむことができました。さて、今日はどの本を入れようかな?(片桐)

完成した巣箱型本箱▶



休館中は脳トレも

まちライブラリー@ウエリスオリーブ町田中町

当館は高齢者住宅併設のカフェです。「この本棚があるから入居を決めた」、「眠れない夜の支えがこの本なの」などのお声もいただき、皆さんと楽しく繋がっています。先日、近所で入居者さんとぼったり会いました。「こんにちは!」と声をかけたものの、お名前が出てこない…。久々すぎたせい?それとも歳のせい?焦ってしまいましたが、元気なお顔を見られてとても嬉しかったです。休館中のto doリストに、脳トレも必須!と痛感した瞬間でした。(奥村)

新しく始めたこと

まちライブラリー@東大阪市文化創造館

ギターの練習を始めました。ステージでスポットライトを浴び、ギューギューギューンと演奏、一瞬の静寂の後、沸き上がる歓声…。若い頃、そんな夢を見たことがあるのです。村上春樹さんの『ノルウェイの森』のレイコさんの奏でるギターへの憧れもあり、ギタリストになりたい! と思ったものでした。久しぶりに『ノルウェイの森』を再読。夢を思い出しました。家族からは琵琶法師のようだと言われながらもStay Home 時間を利用して、毎日練習に励んでいます。(大橋)

静かな春のキャンパス

まちライブラリー@OIC(立命館大学大阪いばらきキャンパス)

立命館大学大阪いばらきキャンパスは地域に開かれた大学で、扉も門もありません。例年この季節は、サークルの勧誘活動をする学生さんの様子を興味津々で眺めながら散歩したり、見学にくる地域の皆さんの姿を構内あちこちで見かけたり。OICならではの光景です。今年はもうしばらく先になりそうですが、あのにぎわいが戻る日を楽しみにしたいと思います。(野田)

お知らせ

「まちライブ06」
発売中

毎年恒例のブックフェスタin関西&マイクロ・ライブラリーサミット2019年の特集です。まちライブラリーHPよりお求めいただけます。

考える時 ～本と共に～

🔄 コロナウイルスで外出を自粛し、仕事も遊びも思うようにできなくなっていることに多くの人が歯がゆく、不安な気持ちになっていることと思います。

私も日々、自宅におります。テレビ会議でまちライブラリーに関する議論をすることもあり、気づくことが多いです。また、普段読まないような本を読み、思索にあてる時間も多くなりました。

『翻訳できない世界のことば』(エラ・フランシス・サンダース著、前田まゆみ訳：創元社)という本があります。パラパラとみていると気になる言葉に出会います。「フィーカ」というスウェーデン語は、「日々の仕事の手を休め、おしゃべりしたり休憩したりするために集うこと。カフェ、家いざれでも、コーヒーを飲んだり、お菓子を食べたりして、数時間」過ごすことを表す言葉です。普段のさりげない日常が失われている今、とても響く言葉ですね。

『生きるということ』(エーリッヒ・フロム著、佐野哲郎訳：紀伊国屋書店)は、<持つこと>と<あること>を対比しながら、「人が生きていくうえで二つの基本的な存在様式である。財産や知識、社会的地位や権力の所有にこだわるのか、それとも自分の能力を能動的に発揮し、生きる喜びを確信できる生き方を選ぶのか」と

問い、私たちに考えることを促します。

20世紀前半、人類を苦しめた数々のことが起こりました。『日本人のための第一次世界大戦史』(板谷敏彦著：毎日新聞社)は、この時代の様子を教えてください。19世紀後半から20世紀前半にかけて、20世紀後半から今日までのように、あらゆる分野で技術革新がなされました。蒸気船が誕生し、鉄道網が生まれ、電気通信が発達して世界は小さくなりました。「80日間世界一周」という映画は、1872年にロンドンの会員制クラブでの会話から始まった設定だそうです。蒸気船は、決められた日にちでアメリカやインドまで人を運び、そこから鉄道があれば大陸を横断できる。目標が見える旅が可能になってグローバル時代が到来し、ツーリズムが成立したのです。

グローバル化は、欧州諸国に近代国家としての意識を高め、それぞれの「国益」に応じた利害の対立を生み、「第一次世界大戦」(1914年～1918年)を引き起こしました。その終戦前に、当初、中立国であったアメリカ合衆国が参戦します。その時に「スペイン風邪」が広がります。ウイルスの発現は、カンザス州の新兵訓練所だったとのこと。数か月でヨーロッパに広がり、世界大戦で亡くなった方が、1650万人、「スペイン風邪」の犠牲者は、3000万人～

5000万人となりました。

ここで悲劇は終わらず、その続きが起こったというのが私の見方です。日本は、この戦争には参戦しますが、軍属の死者は415名と少なく、戦争の当初は大不況に陥るのですが、途中から世界的な貿易需要が起こり、多くの貿易会社が勃興し、戦争景気に沸きます。その間に設立された企業は、多数の自社グループの銀行を設立します。(現在のIT企業の勃興やそれに並行して電子マネーやデジタル決済会社が勃興するように。)

ところが、1923年に関東大震災が発生。ここで国の財政は破綻する状態に追い込まれるのですが、さらに1927年、昭和金融恐慌が発生します。戦争景気で沸いていたところに設立された銀行が、「鈴木商店」の取り付け騒ぎに端を発し、ことごとく取り付け騒ぎに巻き込まれていく。さらに1929年、前年まで好景気に浮かっていた米国で「大恐慌」が発生するのです。その後、各国経済を破壊的なまでに押しつぶす恐慌が、結果として第二次世界大戦を引き起こす遠因になっていると私は思うのです。

この過程の詳細を十分理解する知識は私にはないのですが、一つ言えることは、お互いの国、人に対する寛容さが失われたことによる連鎖が悲劇的な結果を生んだことは間違いないと

いうことです。今も「自粛をしない店に嫌がらせをする」「他県ナンバーの車を傷つける」「医療従事者や家族を差別的に扱う」ということが報道されています。国同士のいがみ合いだけでなく、人の気持ちが、内向きになればなるほど「心の中のウイルス」は、ますます大きくなっていくのです。

21世紀にこのような悲劇を起こさないためには、必要以上にウイルスを恐れないことだと思います。我々は、何十万年もウイルスと共存しています。他の人とも協力し、社会を形成してきました。同時に人が人を傷つけあう危険性をも十分に味わってきました。人への心配りが必要な時代になったと言えるでしょう。冒頭の『翻訳できない世界のことば』には、「ナンチ：韓国語：他人の気持ちをひそやかにくみとる、こまやかな心づかい」という言葉があります。そして「ナーズ：ウルドゥー語：だれかに無条件に愛されることによって生まれてくる。自信と心の安定」が今こそ必要なのではないのでしょうか。まちライブラリーが、そのような場になることを心より祈っています。

2020年5月

まちライブラリー提唱者 磯井純充